大正十年四月十七日　時事新報　第一萬三千五百五十五號附録（日曜畫報第十號）

[redacted]

春光を浴びて
希望燃ゆる自然生活

[redacted]

春子さんと海狸
永代美知代

あるところにお嬢さんがありました。春子さんと云つて、やつと今年から學校へ上つたばかりですから、髪の毛も長くはなくて、とかすのにどうさないのですが、何故だかおかんかをとかすのが大嫌ひで、[illegible]何さか彼さか、むつからないではすみませんでした。

「春子さん、おかんかをとかしませう」

[illegible]が仰有ると春子さんは云ひました。

「いやあよ私、いやだつてばよ」すると[illegible]から叔父様が仰有いました。

「春子さんはお櫛を持つてないんだらう」

「アラ、持つてるわよ、ゴム櫛よ、すき櫛も持つてるわ」

「ドラお見せ」

春子さんは大威張りで持つて來ました。

「うむ、成る程、これは偉い！」

叔父様は春子さんの櫛を見ながら「おまけにこれは眞新しいのだね、これは立派だ！」

餘りひどく感心なさるものですから、春子さんは何だか極りが悪いやうな気がして來ました。

「ねえ春子さん、それではお櫛を持つてるのに、春子さんは何故爪なんかでおかんかをとかすんだい？」

「えゝ？」

[illegible]叔父様が持つた[illegible]ひながら、春子さんは云ひました。

「私、爪なんか無いわ」

「アゝ成る程、するで指でやるんだね、指で？」

「うそ！そんな指だの爪だのでもつて、おかんかをとかす人無いわよ」

「ところが、あるんだ。僕はアメリカで見て來ましたよ」

「アラ左様、アメリカの何處で？」

この叔父様は[illegible]なので、年中方々の國を[illegible]つてらつしやいますから、いつでも不思議な、珍らしい、面白いお話をどつさり聞かせて下さるのでした。

「ね、阿父様、アメリカの何處でなの？」

春子さんは聞きました。

「それは北アメリカの森の中に住つてる海狸の兄弟たがね、よつぽど[illegible]ばつたい、[illegible]

[redacted]

[redacted]

「アラ、あんなに毛だらけのまあ」

「アラ、あんなに毛だらけのまあ」

「まあおそろしい、猫の毛ばかりでなく、猫の手に化けるなんて」

「まあおそろしい、猫の毛ばかりでなく、猫の手に化けるなんて」